

母への<sup>おも</sup>想い

かわぐち ひろこ  
川口 弘子

## ● 8月6日以前の様子

当時、私の家は、上天満町かみてんまちょうにあり、母、兄、姉、私の4人家族でした。父、面家利男やとしおは、昭和13年に中国で戦死しました。父が戦死した時、私は幼かったので、父の顔は写真でしか知りません。家に飾ってあった父の写真を見ては、「お父さんのゲタを持って行ってあげないから、写真から出てこられないのよ」と言っていたそうです。

母、静子しずこは女手一つで私たちを育ててくれました。人一倍教育熱心で、戦時中でも習字やバレエなどを習わせてくれ、兄が中学の入学試験を受ける時には、毎朝お百度参りをしていました。夫が亡くなり、「子供たちに残してあげられるものは、教育しかない」と考えていたようです。

そのため母は、毎日朝から晩まで、いくつもの仕事を掛け持ちして働いていました。朝の新聞配達の時、兄や姉も母を手伝い、私も小さかったですが、家族の後をついて歩いていたことを覚えています。

母は毎日忙しく働いていましたが、同じ町内には叔父一家が、近くの広瀬元町ひろせもとまちには祖父一家が住んでおり、また当時は近所が皆、親戚しんせきのような付き合いをしていましたので、周りの人たちが私たちの面倒を見、助けてくれました。

そのころ、多くの国民学校では、集団疎開や縁故疎開が行われていました。当時天満国民学校の3年生だった私も、同じ学校の6年生だった姉のスミエと一緒に、湯来町ゆきちょうのお寺へ集団疎開をしていました。毎週母と兄の敏之としゆきが、芋など持って面会に来てくれましたが、幼い私たちにとって、親元を離れた生活はとてつらいものでした。母が「死ぬのなら親子一緒に死のう」と言うので、私も「もう帰りたい、帰りたい」と言って、上天満町の家に戻ってきました。今思えば、あのまま疎開先に残っていたら、母や兄も面会に来ていたでしょうから、皆、助かって元気でいたのかも知れません。

## ● 8月6日の様子

8月6日、私は学校が休みだったので、友達と近所に出かけていました。

上空をB29が、飛行機雲をひきながら飛んでいるのを見て、とっさに両手で目と耳をふさぎました。当時、爆弾が落ちたと思ったら、目と耳をふさぐよう訓練されていたので、無意識にそうしたのだと思います。目をふさいでいた

ため、閃光せんこうは見えていません。

ちょうどその時私がいた場所は、運よく家の軒先だったため、壁の影になり無傷で熱さも感じませんでした。一緒にいた友達も、少し頭にケガをただけなので、私たちは家のすき間から自力ではい出し、家に帰りました。

家に帰ると、被爆し傷を負った母が私を待っていました。その日、母は米の配給を受け取りに出かけて、自宅に戻る途中で被爆しました。母はすぐ、家中から救急袋だけを持ち出し、私を連れて逃げました。

周りを見ると、家屋が倒壊し、橋の欄干も燃えていました。その橋を渡って、己斐こいの方へ向かいました。逃げている途中、真っ黒に焼け焦げた人が「お水ちょうだい、お水ちょうだい」と助けを求めてきましたが、その時は、逃げることに必死で何もできませんでした。あの時、その人の名前だけでも聞いてあげればよかったと、今でも後悔しています。

やっとの思いで己斐国民学校に着き、気が付いたら私は裸足はだしでした。ガレキの中を逃げて来たのに、よくケガをしなかったと思います。

学校は、教室も廊下も負傷者でいっぱいでした。そこで、母のケガの手当てをしてもらいました。母は、手、足、背中に大ヤケド、顔にも少しヤケドを負い、そして頭は大きく陥没していました。薬を少し付けてもらっただけで、治療は終わりましたが、今思えば、本当に薬を付けてもらったかどうか、定かではありません。

それから母と一緒に、町内で指定されていた小河内町おがわちまちの避難場所に向かいました。避難場所に着くと、空から黒い雨がふってきたので、近くに落ちていたトタンを持って来て、雨をしのぎました。雨が上がりしばらくすると、兄の敏之がやって来ました。

当時兄は、松本工業学校2年生で、宇品沖うしなにある金輪島かなわじまの工場に、学徒動員

されていました。友人と一緒に動員先に向かっている途中、御幸橋みゆきばし付近で被爆しましたが、私たち家族のことが心配で、動員先には向かわずすぐに自宅に引き返したそうです。広島電鉄の本社があったあたりは、両側が燃えて通れないので、修道中学の方に向かい、元安川もとやすがわと太田川おおたがわを舟で渡り、次に橋を渡ってお

昼ごろやっと<sup>かんのんまち</sup>観音町に着いたそうです。その途中のことですが、幼稚園がつぶれて建物の下敷きになっていると、助けを求められましたが、助けることが出来ませんでした。兄は、一刻も早く家族の安否を確かめたい一心で、急いでいたのです。かわいそうなことをしたと言っていました。

帰ってみると、家のすぐ側まで火の手が迫っていたので、すぐに防火バケツを使って、その火を消し止めたと後から聞きました。それから家にだれもいなかったのので、私たちを捜しに小河内町に向かい、無事に再会することができました。

姉は、6日の朝「学校には行きたくない」と言っていたそうです。しかし母は、姉が<sup>やまなか</sup>山中高等女学校に進学するよう考えていたので、学校を休むことを許しませんでした。その日の朝も母は、いつもと同じように姉を学校へ送り出していました。姉は帰って来ませんでした。

#### ● 7日以降の様子

翌日、兄は帰ってこない姉を捜しに、天満国民学校へ行きました。兄は、当日姉が校長室で掃除をしていたと聞き、辺りを捜したそうですが、校舎はぺちゃんこにつぶれており、すべてが灰と化していた焼け跡には何もなかったそうです。

母と兄と私の3人は、2日か3日小河内町の避難場所にいましたが、母が姉のことを心配するので、家へ戻ることになりました。

家に戻ってからの母は、ずっと寝たきりで、ケガの手当ては、己斐国民学校で薬を付けてもらった1回きりでした。

運良く我が家は焼け残っていたため、近所の人たちが我が家のふとんを持ち出し使っていました。その様子を見た、叔母の<sup>おもやすえこ</sup>面家末子は「どうしたの!? 皆にはふとんをあげているのに、なぜ自分の親には掛けていないの」と怒りました。兄はまだ工業学校2年生、私も国民学校3年生ですから、今で言うと中学生、小学生に当たる年齢です。子供だけでは何も出来ませんでした。叔母が来てからからは、叔母が母の看病や私たちの世話をしてくれました。叔母の家では、父の弟にあたる夫の<sup>しげお</sup>繁男が山口の部隊に召集されていましたが、妻と娘<sup>のぶ</sup>信

枝が広島にいるという理由で、2日後には広島へ帰っていました。叔父や叔母がいなければ、子供だけなので、大変なことになっていたと思います。

母の顔にできたヤケドは、早く治って喜んでいましたが、背中<sup>の</sup>ヤケドはなかなか治りませんでした。背中<sup>の</sup>ヤケドは乾いて治ったと思っていると突然、皮がずるっとむけるのです。皮の裏は、ウジ虫で一面いっぱいでした。気付かないうちに、背中にウジ虫がわき、背中にびっしりと付いていて、取れるものではありませんでした。母は蚊帳で寝て、私と兄はその側で寝ていましたが、私は、ウジ虫がわいた臭いにおいばかりが気になっていました。

母は、あんな大ケガを負っていましたが、「痛い」とか「かゆい」とか一切言わず、水も欲しがりませんでした。ただ、「桃が食べたい、桃が食べたい」と言うので、井口<sup>いのくち</sup>の方へ叔母が、買いに行ってくれました。今考えると、やはりのどが渴いていたのでしょう。

9月4日の朝方、母が亡くなりました。叔母に「まあ、あんた、お母さんはもう死んでいるじゃない」と言われて初めて、母が亡くなったことに気付きました。それまで私も兄も、まったく気付きませんでした。今思えば、頭が割れて大ケガをしていたのに、よく1か月も生きていたと思います。兵隊さんが負傷者をトラックに乗せ郊外に避難させていた時も、母は姉の消息がわかるまでは絶対家から離れようとしませんでした。母と同じ様に負傷した人で、郊外で治療を受け元気になった人もいました。母は、ただ帰らぬ姉のことが心配で、姉に会いたい一心で生きていたのだと思います。

母の遺体は、亡くなったその日に、家族で向西館<sup>こうせいかん</sup>の跡地<sup>あとち</sup>に行つて焼きました。

でも、悲しいという感情もわかず、涙も出ませんでした。すでに感情が麻痺<sup>まひ</sup>していたのだと思います。その日は雨がふり、母の遺体はなかなか焼けませんでした。

市内は、建物がすべて倒れ、一面焼け野原となり、家からは広島駅や似島<sup>にのしま</sup>が一望できました。いたる所に死体があり、川の死体は、兵隊さんが引き上げて焼いていました。1か月以上もそのままにされた死体もあり、私たちは平気でそこを行ったり来たりしていました。また当時は、原爆というものも知らず、食べるものもなかったのもので、よその畑でできた芋や土に埋めてあった米など被爆

した食べ物を平気で食べていました。

## ●被爆後の生活

私たちは、母が亡くなってからすぐ、親戚しんせきを頼って緑井村みどりいむらへ行き、親戚しんせきの納屋に置いてもらいました。祖父母たちは、もう先に行っておりました。原爆が投下された時、祖父おもの面家留吉やとめきちと祖母のマツノは、自宅の茶の間にいて無事でした。しかし、緑井村に着いた時は元気だった祖父も急に体調を崩し、母が亡くなった5日後に亡くなりました。祖父母と一緒に広瀬元町で生活していた叔父しょうそうの昭三も、自宅の玄関に居たそうなのですが、まったく消息がわからなくなっていました。

緑井村では、今までの生活と違うので戸惑うことも多くありました。1年ぐらい緑井村の学校に通い、その後、広瀬に帰ってきました。皆で力を合わせて、家を建てる所を整地し、バラックを建て住みました。叔父夫婦が親代わりとなり、兄と私を実の子供のように育ててくれました。親が亡くなって寂しいとかそういう感情は全然ありませんでした。

しかし、成長するにつれ、だんだんと親が恋しくなってきました。姉妹同然に育てられていた従姉妹いとこが小学校から家庭教師がついて勉強しているのを見ると、うらやましく少し寂しかったです。叔父家族とは、私が結婚するまでずっと一緒に暮らしていました。家で家具の製造をしていたので、そこで経理の仕事をしていました。

## ●結婚、病気について

昔は、被爆者と言うことを隠している人が多く、特に女性は、結婚のことがあるので被爆者であることを隠し、被爆者健康手帳も申請しない人が多くいました。今は助かっていますが、私も手帳交付開始からしばらくたってから、申請しました。結婚について私は、叔父夫婦の決めた相手と結婚するだろうとずっと思っていました。それで、お見合いで結婚したのですが、幸い結婚相手は、私が被爆者と言うことを気にする人ではありませんでした。

結婚の次は、生まれてくる子供のことが心配でした。私は甲状腺こうじょうせんのガンです。

私の兄も従姉妹もガンになり、結婚して産まれてきた娘は、聴神経腫瘍ちょうしんけいしゅようという病気です。やはり原爆が原因で、病気になったのではないかと心配です。

●平和への思い

子供たちには、よく自分の体験談を話しています。また、一緒に平和記念資料館に行き、原爆が落とされた時の様子も教えています。

昔は、日々の生活に追われて家族の墓参りにもなかなか行けませんでした。今は再々行って、皆と一時おしゃべりをして帰ります。もし母が生きていたら親孝行してあげられたのにとおもいます。だから、母と同年齢の方を見ると、母にできなかった分親孝行したいと思い、放っておけません。

また、大勢の人が犠牲となった中で、今こうして元気でいられることに感謝しています。そして、亡くなった母のことを想おもうと、子供たちのために元気で長生きしたいとおもいます。